第六十回（令和六年度）

彦根市民文芸作品

入賞作品集

彦根市

彦根市教育委員会

彦根市民憲章

豊かな自然と歴史遺産に恵まれた彦根市に住むわたくしたちは、先人のたゆまない努力によって築かれた郷土に誇りと責任をもち、風格と魅力のある都市を創造していくために努力します。

わたくしたち彦根市民は

○　郷土を愛し、
　　水と緑の美しいまちをつくります。
○　歴史と伝統を生かし、
　　文化の香り高いまちをつくります。
○　人権を尊び、
　　お互いに助けあい、信頼しあうまちをつくります。
○　心とからだを鍛え、
　　働く喜びに満ちたまちをつくります。
○　若い力を育て、
　　夢と活気のみなぎるまちをつくります。

（昭和５２年２月１１日制定）

『まえがき』

彦根市長　和田裕行

彦根市民文芸作品入賞作品集も、今回で六十回目の発刊を迎えることとなりました。

第六十回という節目を迎えることができましたのも、本市はもとより、近隣の市町から多数ご応募をいただいた皆様の熱意と意欲の賜物であると深く感謝申し上げます。

今年は延べ二百六十人の方から、総数七百二十五点の作品が寄せられました。いずれの作品も、磨き上げられた独自の感性と豊かな表現力で創作されており、魅力溢れる作品の数々であったと感じております。

さて、前述いたしましたとおり、今年度は第六十回という一つの節目を迎えました。この事業を長年にわたり継続できましたのは、応募いただいた皆様が、ご自身の感性や表現力を磨き続ける努力を惜しまず、その結晶として生み出された、素晴らしい作品の数々を彦根文芸作品へお寄せいただけたからこそ、成り立ってきたと考えております。彦根市民文芸作品を愛し、発展に寄与いただき、心より感謝申し上げます。これからも、創作活動を楽しみ、研鑽を続けていただくとともに、選りすぐりの作品をお寄せいただきますこと、心よりお待ち申し上げております。

最後になりましたが、彦根市民文芸作品の継続と発展に多大なるお力添えをいただくとともに、応募作品と真摯に向き合い、丁寧に審査いただきました選者の皆様に心からお礼を申し上げ、発刊に寄せる言葉とさせていただきます。

令和六年七月

目次

まえがき……1
俳句……3
短歌……8
川柳……14
冠句……19
詩……23
随筆・評論……28
小説……33
あとがき……39

○応募者数･応募点数および入賞者数

	応募者数	応募点数	入賞数			
			特選	入選	佳作	合計
俳句	78人	233句	3句	12句	27句	42句
短歌	44人	127首	3首	6首	16首	25首
川柳	56人	165句	3句	6句	20句	29句
冠句	56人	167句	3句	5句	22句	30句
詩	11人	18編	3編	3編	3編	9編
随筆･評論	13人	13編	1編	2編	3編	6編
小説	2人	2編	0編	1編	1編	2編
計	260人	725点	16点	35点	92点	143点

○選　　者

部門	選者	部門	選者
俳句	秋口 大門・北川 栄子・吉永 幸司	詩	石内 秀典・尾崎 与里子・山本 英子
短歌	河分 武士・澤 絢子・宮本 照男	随筆･評論	今井 友子・藤本 弘子・山口 一
川柳	青木 十九郎・重森 恒雄・峯 裕見子	小説	井上 次雄・杉山 啓志
冠句	西村 吟雪・藤本 淡雪		

（五十音順・敬称略）

俳句

秋口大門
北川栄子
吉永幸司
選

特選

端座して虚空見つむる雨蛙

日夏町　疋田和子

（評）　恋に破れたのか、鳴くのをやめ、よるべなき空を見つめ、世のままならぬことを知る雨蛙。この句の素材は空と蛙、だが、奥行きがある。端座する蛙は悟りの境地か。禅僧の只管打坐の雰囲気。鳥獣戯画の世界を彷彿させるおおらかな作品。（大　門）

特選

百までは生きるつもりで青き踏む

鳥居本町　寺村美惠

（評）　長寿とひと口に言っても、それなりの目標がいるように思う。八十になれば九十を、九十になれば百をと言うように先の目標と、生きる努力も大切な要素なのかも知れない。私も含めて、誰もが元気で百歳を迎えられたら喜ばしいと思う。（栄　子）

特選

白波の尖る湖面や冴返る

大藪町　岩沢青水

（評）　母なる琵琶湖は四季折々、様々な姿を見せてくれます。この日は、風が強く波が泡立って鋭く見えたのでしょうか。少し暖かくなりかけたと思う間もなく寒さが戻ってきた時の季節感を巧みにとらえています。（幸　司）

入選

城遥か農事励ます百千鳥

八坂町　飯島　潤

（評）　春耕にうちこむ作者。その傍らの山裾、杜かも知れない鳥の声。鳥たちも活発になり声を掛け合う季節。その声を励ましと捉え農事に勤しむ作者。はるかに名城の白亜の城山が控える。（大　門）

入選

手袋に土黒々と菊根分け

大藪町　吉田和治

（評）　元気よく沢山出て来た菊の芽を分けて増やすのである。黒々とした土から、よく肥えた土を想像する。分植した菊苗がそれぞれ良い花を咲かせて、切り花とか仏花等の一端を担うかも知れない。手を掛けて育てる楽しみ。（栄　子）

入選

控へ目も秘めたる強さ水仙花

東近江市　仲岸有子

（評）　春の訪れを告げる花として知られている水仙花は、鮮やかな白色やクリーム色をしていて心を魅了する美しさをもっています。さらに内に秘めた強さもあります。「控え目」という表現が印象に残りました。（幸　司）

入選

種芋のちから在る顔選び買う

長浜市　野口成人

（評）　種芋を買う時の選別の様子。「ちからある顔」とは確かに抽象的ではあるが、それを経験で補い選別する。おそらく選ばれた芋は立派に育ち家族等の胃を満足させるはず。（大　門）

入選

花の散る音なき音に季の移り

宇尾町　金森光男

（評）　耳を澄ましてみても、風音はすれど花の散る音は聴こえない。初花から始まり、三分、五分、満開、花吹雪と移り変り、気がつけば葉桜となっている。季節の移り変りの早さが感じられる。（栄　子）

入選

一滴の雨粒を抱く柿若葉

米原市　西尾辰之

（評）　柿の若葉は萌黄色で新緑の息吹を感じます。その若葉に一滴の雨粒という情景を美しく仕立てられています。「雨粒抱く」からその瞬間の静けさが伝わってきます。（幸　司）

入選

駄菓子屋のレジはそろばん鰯雲

平田町　北村浩子

（評）　駄菓子屋に集まる子ども達。店主はこれらの子ども達と親しさを保ちつつ、小銭を勘定。十円なり二十円なりとそろばんを弾く。そんな時代を懐かしみ鰯雲を眺めている。（大　門）

入選

追伸のような日差しや春を待つ

西今町　前田弘子

（評）　思い出した様に届く暖かい日差しが、ちょっとだけ幸福な気持にしてくれる。「春惜む」は季題にあるが、「冬惜む」は無い。やはり皆が春を待っているからであろう。どこかほっとする心がうまく表現されている。（栄　子）

入選

挑戦は生きる希望よ日々草

平田町　石田そとゑ

（評）　日日草は、その名が示す通り暑さに負けず、強い生命力を象徴する花です。何かに挑戦しようという気持ちと日々の小さな積み重ねが希望に繋がるという前向きなメッセージを伝えています。（幸　司）

入選

許六忌や遺墨に触るる句座涼し

日夏町　寺村澄子

（評）　森川許六は芭蕉の十哲の一人で、書画・武道等その才能は顕著。その遺墨を飾り先人を偲び開いた句会。「十団子」の句にも劣らぬ俳句がいくつも出来たことでしょう。「涼し」とは句座の人と先人許六の遺墨との間にある涼風と見た。（大　門）

入選

だれかれの気づかいあふれ冬ぬくし

日夏町　林正子

（評）　一人一人の心遣いが全体に行き渡り、居心地のよいものとなる。居心地がよければ会話も弾むし、益々良い方へ向かっていくことと思う。ちょっとしたことで心が寒くも、暖かくもなることの不思議。（栄　子）

入選

茶の花の垣根越しから回覧板

長浜市　勝木岩松

（評）　人間関係が希薄になった時代です。近隣同士でも会話が少なくなっているということを耳にします。少し前まで日常的にお隣さん同士声を掛け合った風景を「垣根越し」という表現で想像しました。（幸　司）

佳作　蔵奥に辿る記憶の雛飾り　東近江市　藤本　修

佳作　みちのくの旅のはじめの桜餅　正法寺町　髙井　豊

佳作　いくたびも友の文読む日永かな　中藪町　本田伸一

佳作　流れ来る夕の梵鐘花ぐもり　稲里町　勝見政恵

佳作　古書店は昔銭湯春浅し　本町一丁目　中島暉枝

佳作　解体の重機や空へ冴返る　城町一丁目　北村夭子

佳作　快勝のチーム櫂立て天高し　京町三丁目　林　尚子

佳作　行く春や湖にどっしり竹生島　犬上郡豊郷町　米崎　功

佳作　濃紫一隅のみのげんげ畑　平田町　樋水カツコ

佳作　山菜に春の息吹を味はひぬ　地蔵町　佐古徳子

佳作　慟哭の大地よ人よ年新た　東近江市　坂口靖子

佳作　木枯しや樹齢幾百仁王立ち　米原市　奥村和子

佳作　薫風の吹き抜けてゆく天守閣　高宮町　前川菅子

佳作　爽やかに話す人居てとき忘れ　米原市　田辺仁美

佳作　見つめれば話し出しさふ雛の口　外町　小早川悦子

佳作　水草の浮き出づ湖面秋早　米原市　成宮伯水

佳作　恋路とはお騒がせもの猫の恋
京町一丁目　堀井叔子

佳作　片手づつ脱がすマネキン更衣
長浜市　柴田弥蔵

佳作　長老の法被も踊る秋祭
城町一丁目　松本律子

佳作　元旦や列島揺るがす能登の地震
日夏町　寺村房子

佳作　ドア開けて春風入るる美容室
芹橋一丁目　秋山栄子

佳作　しなやかといふ強さあり枝垂梅
高宮町　細田惠貢子

佳作　卒業の孫の自転車畑を行く
稲里町　野瀬善一

佳作　残雪の比良の山並み光る朝
栄町一丁目　川嵜美智子

佳作　ご城下に刻を知らせる鐘朧
芹橋二丁目　大野優子

佳作　凪の湖万羽の鴨の浮寝かな
後三条町　北村しげ子

佳作　風光る彦根大仏慈悲深し
極楽寺町　古川寛二

《総評》

今年、新年早々能登の大きな地震があり、災禍を受けられた方々に深くお見舞い申し上げます。

さて、今回も多数の俳句をご応募賜り厚くお礼申し上げます。

今回は、投句の時の注意事項を記します。

◎類想、類句を避ける（独自の発想）
◎口語と文語に注意する
◎漢字や送り仮名に注意（辞書で再確認する）
◎投句の字は楷書で誰でも読める字を
◎ひらかなを用いて句のバランスを考える
◎何回も朗読、句のリズムを整える
◎説明にならないこと（散文を避ける）

これらのことに注意して投句に望まれることをお勧めします。

秋口大門

少しずつ投句数が減るのは淋しい限りですが、今回も沢山の力作を寄せて頂き、楽しく拝見させていただきました。

全体的におとなしく手順れた感じは否めませんが、その分しっかりと描写が出来ていたように思います。

十七文字に季題（季語）を入れるのですから、似通った句も出て来ますので、見方を再考して見るのも、斬新な句を作る切っ掛けとなるかも知れません。

またこの一年を元気で吟行に出かけていただき、市民文芸に応募していただきたく願っています。

北川栄子

応募作品は、自然の美しさや日常の出来事から感じたことを丁寧に上手く作品としてまとめておられるものばかりでした。

俳句を作るとき、その時に思い浮かんだ言葉をひとつひとつをつないでいけば、それが自ずと俳句になるのです。俳句の対象は特殊なものはひとつもありません。目にするもの、耳に伝わるもの等すべてが俳句の主役なのです。俳句を気楽に楽しんでほしいものです。

吉永幸司

選者吟

弁がらの軒は泥んこ夏つばめ　秋口大門

万緑の生命力に染まりけり　北川栄子

初夏の陽を汲みては零す水車かな　吉永幸司

短歌

河分武士　澤絢子　宮本照男　選

特選

母の着し着物解きてリメイクし
腕に抱かるるような温もり

甘呂町　日和田　喜美子

（評）「母の温もり」は幾つになっても忘れられない。生前の母の着物を仕立て直して着てみると、今でも母に抱かれるような温もりが感じられると言う。テーマに合わせた纏まりとリズム感が秀逸。

特選

馬酔木咲く近江の寺の廻廊に
あはゆき垂（しづ）るる音をききをり

西今町　松本　トシ子

（評）春につぼ形の小さな花を下垂状に付けている抑制したような控え目な馬酔木と近江の古刹の奥行きのある静けさを具体的にかつ的確な描写により余音嫋嫋と詠いあげた。格調ある作品となった。

特選

廃校の正門前に佇ちており
さんざめく児童（こ）らの声聞こえくるや

長浜市　小谷　敏夫

（評）永年にわたり児童らを見守り、よき人材を育成してきた学校の廃校。今その正門に佇む作者には、さんざめく児童らの声が聞こえ、万感が迫り来たのであろう。地域の歴史の一終止符に、尽きぬ懐旧の念と深い寂寥感が如実に詠まれ、地域民の情感の結集歌のようで重厚な秀歌。

入選

戦地の子無邪気に映るその刹那
円空佛の数多にかわる

日夏町　石原　不二子

（評）　戦地での無邪気な子どもが放映され、その刹那映像が円空佛に変わったのか、作者が心のなかで感じたことなのか。江戸時代に各地を遍歴して多数の仏像を刻んだ円空が浮かんだという。哀切の歌。

入選

北アルプス共に登った登山杖
今じゃ普通の杖になりけり

米原市　西尾　辰之

（評）　若い頃には飛騨の山脈を共に踏破した愛用の登山杖が今では日常生活に縋る杖になってしまったという。落差を杖をテーマに簡潔に纏めて、読者の共感を呼ぶ。「普通の杖」に実感が籠る。

入選

下校する乙女ら交わす十字路の
別れの言の葉散らす木枯らし

芹橋二丁目　古池　陽彦

（評）　歌は表現の具体が大切だが上三句の具体が生きて、結句へのリズムもゆるゆるとして「言の葉散らす」が切なくいじらしい余韻を与えている。簡潔表現の的確さと場面を摘まみだして見せるような一首である。

入選

緑濃き欅の大樹風受けて
手足のごとく上枝（ほつえ）動かす

中藪町　山川　美江

（評）　ゆったりと揺れる欅の小枝を新鮮な感覚で歌っている。擬人法で捉えつつ、同時に枝の尖端に着目したのがよかった。「手足のごとく」は作者のおだやかな心の動きでもある。日常は非凡なものに溢れています。

入選

限りなき未来に挑む人間の
技を忘るる今宵の満月

日夏町　寺村　亨子

（評）　近年各国が急速に月探査の研究を進め、月面基地の建設計画まで立てられている。限りなき未来への挑戦も必要だが、月の賞美はその類ではない。結句「今宵の満月」に、その賞美が端的に詠まれ、読者をも優雅な宵に誘ってくれる詩情豊かな力作。

入選

寒けしも部活の子らの白き息
唸るバットに粉雪の舞う

大藪町　外村　輝夫

（評）　寒さを物ともせず部活に打ち込む球児たちに、作者の温かいエールが込められた一首。一首全体の具体的かつ適確な表現に、その情景と子らの清純な姿が鮮明に浮かぶ。同時に精魂をこめ練習する球児への賞讃・激励も感じられ、深い共感が湧くよき歌。

佳作

呼び込みの声の明るき輪島朝市通りを
思い出しつつ募金をしたり

高宮町　細田惠貢子

佳作

如何ともし難き自然に身を置きて
瓦礫と化した能登を哀しむ

本庄町　田口敏子

佳作

生も良し煮てもなお良し焼いて良し
朝採り野菜並ぶ食卓

長浜市　野口成人

佳作

日脚すこし伸びたるゆうべ水の面に
のこる茜を走る鴨らは

正法寺町　髙井豊

佳作

雨の日も傘差し散歩二人連れ
足の運動口の運動

地蔵町　佐古徳子

佳作

うなずきてただ聞くのみの介護なり
小さく割りたる菓子に茶を添う

本庄町　田口洋子

佳作

卓上の珠洲焼の茶碗に思ほゆる
被災の街の疾く復興を

古沢町　野洲康雄

佳作

枝ぶりは老いたる剣士力溜め
花開きたる盆梅の意気

犬上郡多賀町　木村正子

佳作

夏の日のリハビリ器具の終了音
「エリーゼのために」そは和みゆく

東近江市　坂口靖子

佳作

手植え田の昭和遠しや母白寿
昔話の温し春来た

東近江市　藤本修

佳作

久し振り生れ育った我が村の
旅人となりゆるゆる歩く

鳥居本町　寺村美恵

佳作

飾り終え雛人形に手を合わす
母への感謝子らへの願い

犬上郡豊郷町　森　典子

佳作

千両をはるか超えそう小判草
道の駅には募金箱あり

東近江市　村上　定

佳作

ガラス窓花びらそっと貼り付きし
ふし床の老母（はは）の声もほころぶ

稲里町　勝見政恵

佳作

婿となる人よく話しよく笑ひ
炬燵へ崩す正座せし足

平田町　北村浩子

佳作

千年の時を耐へ来し山中に
注連縄張られ神となる杉

東近江市　平田三栄子

《総評》

今年も応募者は、彦根市、米原市、長浜市、東近江市、近江八幡市、犬上郡、愛知郡など広域から寄せられ、誠に喜ばしく思います。

テーマや歌の形態には個性ある作品が多くあり、選考には時間をかけて何度も読み返しました。

高齢で熟練された作品が多いと思いますが、若い世代の作品が中々見られないのが残念です。将来のことを考えますと、日頃から歌集を読んだり、多くの方々に歌会への参加をお勧めいたします。自分の歌がうまくなりたいと思ったら、歌会に出て、批評を受け、他人の歌も読んで関わりを深めることが大切です。

短歌はみじか歌ですが、感動を与え、心に染みる宝石のように輝く歌をつくるために、読み返し書き直し、推敲をして下さい。

河分武士

第六十回となる「彦根市民文芸作品」は、市民憲章の「歴史と伝統を生かし、文化の香り高いまちをつくる」を、市の総力を挙げ永年にわたり実践して来られた貴重な財宝であると、心よりお祝い申しあげます。

短歌部門では今年も日頃の情念を意欲的に真摯に詠まれた力作揃いで、深い歌意を読み解きながら慎重に選考させていただきました。

題材は、景観や四季、家族や地域に次ぎ、能登の震災や戦争が多く見られ、一年がよく反映されていました。

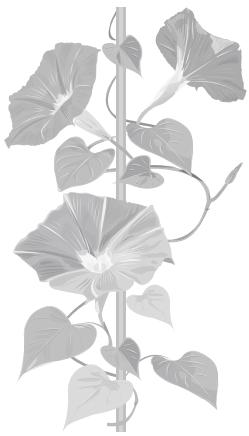
今後も時勢や日常生活での思いや願いをどう作歌していくか、題材の焦点化・詩情や韻律等に創意工夫されご健詠されますようお祈りいたします。岡野弘彦氏のお言葉「歌は生涯の心の伴侶」を糧にして!!

文化の香り高いまちのさらなるご発展をご祈念申し上げ、総評とさせていただきます。

澤絢子

今年も熱心な方々の応募作品を拝見できたことうれしく思います。近年応募者の数はやや少なくなってさみしい感はぬぐえませんが、大事なのは応募者個々の作品の質です。日常の暮らしから見過ごしがちなものを作者独自の目線で表現したものも目にしました。読者が補って読んでくれる余地を残して言い過ぎない（説明的ではない）ことの大切さを常に心がけて詩情に溢れた表現を工夫しつつ詠みつづけていただきたい。

宮本照男



選者詠

花の生涯国を憂えし井伊大老の
歌碑さび翳ろう秋風のなか
河分武士

全盲のパラマラソンをめざす母に
息子は日々伴走父の遺志継ぐ
澤絢子

ひたひたと鈍色の雲迫りくる
梅一枝のゆれる埋木舎
宮本照男

川柳

青木十九郎
重森恒雄　選
峯裕見子

特選　妻にある朝採り胡瓜ほどの棘

長浜市　野口成人

（評）　まだ朝露に濡れているような胡瓜。手にチクッと棘が刺さることがある。そのような性格の妻であるよと作者は言う。「ほどの」が夫婦の機微を見せて巧みである。妻のその性格も読者には愉快だ。（裕見子）

特選　合羽買う雨が虚ろにならぬよう

東近江市　知野見松子

（評）　雨が降ったら雨に打たれればいいのだ。合羽を買ってその日を待っている。肩を背を叩く雨に打たれて深く感じることがあるのだろう。
眺めていれば優しい雨かもしれないが・・。（恒雄）

特選　母さんは北風だってお茶を出す

八坂町　小野椿

（評）　柔和なお顔の、人のいい、細やかな気配りの行き届いたお母さん。このようなお母さんに育まれた人は幸せに恵まれています。きっとあなたも、お母さんに似ているのでしょう。（十九郎）

入選　ばあちゃんのどこを押しても笑い声

八坂町　山本はるか

（評）　孫にとって「明るいばあちゃん」は救いである。親は「ちゃんと育てねば」との思いから厳しく接してしまうことが多い。無条件で受け入れて愛してくれるばあちゃん。いつも笑っているばあちゃん。（裕見子）

入選　ブギウギのリズムに乗って紅をさす

須越町　島田洋子

（評）　NHKの朝の連続テレビ小説「ブギウギ」を観ながら朝出かける前の化粧をしている。その8拍子のリズムは軽快で、明るく元気な顔が仕上がってゆく。（恒雄）

入選　一冊の絵本に母の声がある

正法寺町　髙井豊

（評）　お母さんがいつも聴かせてくださった童話の絵本。お母さんの優しい声に乗って私は夢の国に誘われて、夢中になって聴いていました。今でもその絵本を広げると、お母さんの懐かしい声が聞こえてきます。（十九郎）

入選　安売りと書かれて青い林檎達

稲里町　覇流不良者

（評）　生産者が苦労して作った林檎である。「安売り」の札はリンゴにとっても、いかにも不本意であろう。作者の真意とは違うかもしれないが、私には若い人の就職や求人の内容。また、これから生きて行くことの厳しさなども考えさせられてしまうのである。（裕見子）

入選　キャベツ半分逞しくもりあがる

新海浜二丁目　森口ゆめみ

（評）　さぞかし大きくみずみずしく育ったキャベツなのだろう。半分だけのキャベツがでんと座り盛り上がり方が逞しい。出来も良くて美味しいに違いない。（恒雄）

入選　寂しさを包んでくれた春日和

日夏町　浅井利行

（評）　何かの事情で心に隙間風が吹き抜けて、物寂しい日々が続いています。しかし、自然はありがたい。暖かいのどかな春が訪れ、あなたを包み込んでくれました。（十九郎）

佳作　大試験控える孫のストレッチ

地蔵町　佐古徳子

佳作　どうしてるこの曲聴くと友の顔

大藪町　古川和子

佳作　なぜ出来ぬひと月前は出来たのに

甘呂町　日和田喜美子

佳作　桜咲くお尻ほんのり春ふたり

須越町　梅本愛子

佳作　まだまだと夢が両手をはみ出して

犬上郡豊郷町　須田さゆり

佳作　世の中を変えるつもりが世話になる

須越町　疋田浩二

佳作　咲く時を知ってる花はゆったりと

西沼波町　外海芳子

佳作　散りゆきてなお美しき花いかだ

馬場二丁目　木村美智子

佳作　ボタン穴をそのままに着る亡母のセーター
犬上郡甲良町　川口利江

佳作　三途の川ナンバーカード要りますか
大藪町　大塚しのぶ

佳作　いい夢を見させてくれた布団干す
鳥居本町　寺村美恵

佳作　八分咲き保ったままで弾んでる
須越町　疋田弥栄子

佳作　満月がまるくなれない紛争地
大藪町　小南苑子

佳作　コロコロと老いるなにやら引っさげて
犬上郡多賀町　清水容子

佳作　老いの春一度は捨てた夢を呼ぶ
宇尾町　金森光男

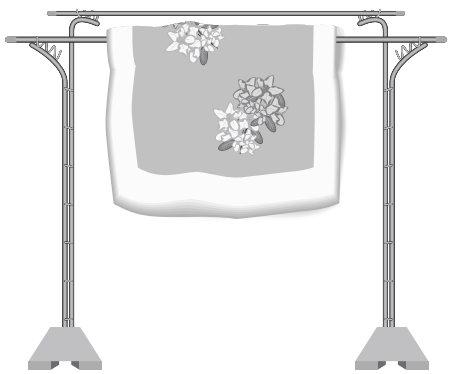
佳作　あたりまえか普通に水が出る暮らし
東沼波町　木原正

佳作　薬ぬる傘寿の重き夫の背
京町一丁目　川辺由子

佳作　ポストです孤独ですけど存在感
東近江市　村上定

佳作　高齢者聞こえなくても通じてる
日夏町　真木玉子

佳作　ふらここに米寿の身なるを忘れけり
米原市　西尾辰之



《総評》

彦根市民文芸に川柳部門が設けられたのは昭和五十（一九七五）年度です。これまでの選者の皆様のご努力は勿論のこと、彦根市の担当部門の皆様のお陰だと思います。これからも、川柳部門が充実した内容で続いて行くことを切に願っています。

私がこの総評を初めて書いたのは平成三（一九九一）年度で、それ以来、今回が三十四回目になりました。この部門に少しでも役に立ったのであれば無上の光栄です。これからも生ある限りこの部門の振興に努めてまいります。

応募作品の中で、内容がありふれていて平凡なものは入賞率が低くなります。難しいことですが、絶えず新しい着眼点で対象を見詰めて、作品に仕上げてください。創作の苦しさは、作品が出来上がると喜びに代わってゆきます。これからも、頑張って応募してください。

入賞作品は、作者の創作の努力がもたらしたものです。いつの日か、これらの方々の中から、指導者が現れてくることを大いに期待しています。

青木　十九郎

今回の応募者数は五十六名で一六五句の中から二十九句を選びました。彦根市内と近郊の市町の川柳愛好家の皆様と句を通じて交流できたことを喜んでいます。

喜んではいるのですが、今年は特段新たな物語を見せていただける句は少なかったように思います。

今年のＮＨＫの大河ドラマが「光る君へ」で紫式部の物語、また二月からのドラマでは三浦しをん著の「舟を編む」、辞書造りの話でした。「言葉」の面白さや奥深さを噛みしめながら楽しく観させてもらいながら、多くを学んでいます。

枕草子の「をかし」の世界から現代の「やばい」まで言葉は変遷しています。また、カタカナ語の氾濫や差別語に類する言葉の使いにくさもあります。

今の言葉で今を句にする、というのは案外難しいものです。言葉という変化する道具をどう使いこなすか。みんなで挑戦しましょう。

重森　恒雄

自身が川柳を書き始めた頃のことを思い起こすと、現状に不満があるわけではないのに「ここと違うどこか」や「言葉にしたいのにどう言えばいいのか分からないこと」への希求を抱えていたように思います。

そして、そんな者がなぜ絵画教室やコーラスやパッチワークではなくて、川柳に向かったのか。それは今も答えが見つからないのですが、私が伸ばした腕を川柳がグイッと引っぱってくれたのだと感じています。至らぬ私を「それでもいいのだよ」と言ってもらえた実感があったのかもしれません。

彦根市民文芸の川柳は他者に向ける目の優しさや社会人としての良識を感じさせる句が多いです。しかしそれは、ややもすると標語

やスローガンになってしまいがちです。
美しくまとまった句を書く必要はありません。完璧ではない自分を見つめ、自分を取り巻くものに目を凝らして作品を書いていただきたいと思っています。
作品を寄せてくださったすべての方に感謝を込めて。

峯　裕見子

選者吟

老いの歩を野花がウインクしてくれる　青木　十九郎

友だちはスーパームーンを背負ってくる　重森　恒雄

ばあちゃんが杖でつついて降らす雨　峯　裕見子

冠句

西村吟雪
藤本淡雪
選

特選　試みる　妻の寝込みて立つ厨（くりや）

蒲生郡竜王町　松瀬文恵

（評）昭和生れの男性は、特に女性の城に踏み入ることなく育ちました。思いもよらず家族が体調を崩され初めての挑戦。新しい自分の姿に妻自身も安心しておられることでしょう。

特選　ひかる湖　鶯に似たり沖の波

長曽根南町　高恵三郎

（評）日差しが燦々と瓦屋根に降り注ぐ如く、湖上を照らす。大らかな自然の営み、波は沖から岸へと、波の様子を上手く捉えておられます。

特選　試みる　奉仕に生きるラストラン

蒲生郡竜王町　松瀬竜子

（評）生かされ生きて、早や高齢者。物寂しい日々生き甲斐を見つけ、老躯に相談しながら昔取った杵柄を生かし、社会に恩を返す。終章の日々たのしく。

入選　念を押す　医師の説明聞きながら

鳥居本町　寺村美恵

（評）告知に惑い、自分や家族の為に、明日の生き方治療方法等、真剣に相談しておられる様子が手に取る様に解ります。

入選　ひかる湖　大志を胸に周航歌

田附町　大谷みつ子

（評）学業を終え故郷を後に旅立つ決意。見慣れた琵琶湖。学友恩師の歌声に送られてホームに立つ吾。

入選　念を押す　老いの歩幅で弾む靴

金沢町　荒見金一

（評）日々自己を確かめ、背伸びすることなく暮すことが大切。急がず焦らず、大地を蹴る如く、今日も自分と向き合い、明日に向って人生を楽しむ。

入選　試みる　違う自分になりたくて

稲部町　辻昭子

（評）自分本位で来た人生。初めて味わう大きな挫折。明日（あした）へ自我捨て人生を見直しハンドルを切り替へ、新たな人生に挑戦する。

入選　念を押す　納得ゆくまで橋叩く

新海町　今堀敏子

（評）幾つに成っても悩みは付きまとう。揺れる心を確かめ神仏に託す、失敗を怖れ慎重に事を運ぶ。

佳作　試みる　顔認証でドア開ける
長浜市　野口成人

佳作　ひかる湖　航跡一本向かう魞
普光寺町　河合仙治

佳作　念を押す　靴紐直す七合目
蒲生郡竜王町　松瀬博美

佳作　試みる　遅くはないと好きな趣味
正法寺町　金子君子

佳作　ひかる湖　学びの小五浪まくら
犬上郡豊郷町　伊香とし子

佳作　念を押す　現役ですと錆びた針
米原市　西尾辰之

佳作　ひかる湖　荒神山に飛ぶカイト
稲里町　覇流不良者

佳作　試みる　この壁破り殻を脱ぐ
清崎町　辻哲雄

佳作　念を押す　角度を変えて見る姿勢
蒲生郡竜王町　苗村厚子

佳作　ひかる湖　花吹雪舞う城の街
犬上郡豊郷町　西山節子

佳作　念を押す　今の君への信頼度
愛知郡愛荘町　宮地学

佳作　試みる　時代おくれもそこそこに
稲里町　勝見政恵

佳作　ひかる湖　青春の日の亡夫まぶし
大藪町　大塚しのぶ

佳作　念を押す　滲み出ている親心
大藪町　清水慶昭

佳作　試みる　天辺めざして滾る汗
犬上郡甲良町　上野初子

佳作　ひかる湖　市民ランナー春うらら
日夏町　大菅恵美子

佳作　試みる　激辛と言ふ新世界
京町一丁目　堀井叔子

佳作　試みる　背広着こなす新社員
極楽寺町　古川寛二

佳作　試みる　義母のレシピの大根漬け
普光寺町　河合淳子

佳作　念を押す　君への思い断ち切れず
清崎町　柳本和子

佳作　念を押す　進路は青く澄み渡り
鳥居本町　滝口寿美夫

佳作　ひかる湖　妻のスケッチみずみずし
戸賀町　四ツ門信夫

《総評》

彦根市民文芸冠句投句者の皆様こんにちは。

今年度は、藤本淡雪先生と一緒に選をさせていただきました。今年は、昨年より投句者が三名減りましたが、皆どの句どの句も素晴らしく甲乙つけがたく有意義な勉強の機会をいただき有難うございました。又今年は新しい傾向の句が多く見受けられ次回が楽しみです。

冠句は、川柳や俳句と同様の五、七、五、の短詩文芸です。冠題の上句五文字に対し中句、下句の十二文字で詠み上げる、生活（くらし）の詩（うた）と先輩から教わりました。何時でも何処でも紙と鉛筆一本有れば詠むことが出来ます。新しい時代へ新しい冠句をどんどん詠まれます様お祈り致しております。

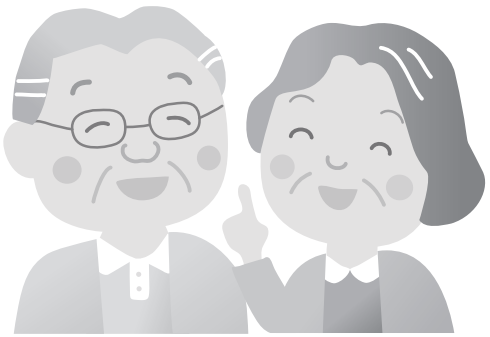
西村　吟雪

選者吟

ひかる湖　近江を奏づ雲の峰　藤本淡雪

試みる　乗ってくれない縄電車　藤本淡雪

念を押す　介護は互い頼み合う　西村吟雪



詩

石内秀典
尾崎与里子　選
山本英子

特選

さくら

正法寺町
髙井　豊

さくらの花が舞い降りる
音もなく地に落ちる
落ちるまでのわずかな時間
花びらは
空ともよべない空間に
やさしい文字を書く
誰も知らない
誰にもわからない文字を
たったひとつ　体中で書く
ほんのり赤く染めて

風が吹くと
花びらはいっせいに
いのちの文字を書き急ぐ

（評）　風が吹くといっせいに散り急ぐさくらの花びらのその一枚一枚が、誰も知らない誰にもわからない自分だけの文字を、生命ごと燃やして書いて散っていくととらえる感性の鋭い美しさに打たれます。

特選

春の雪

東近江市
前川利孝

春分
季節は春になったが
時の神は単純に日をめくらず
なにを誤ったのか
六〇日分のカレンダーを一気に戻す

今朝は寒い北風が吹き
雪が舞っている
雪はまわりの世界を白く変え
天は鉛色の雲をとどめている
梅は花を落とし切ったようだが
山茶花は最後の一輪を蓄えている
自然は芽吹きの前に身をすくめ
あたりには真冬と変わらぬ白と灰の
陰うつな光景が広がる

・・半年前
自然は
こく暑にあえぎ
少雨でダムも枯れ
水が届かず不作だったコメ作り

今年も私はこよみに忠実に
今朝から種もみを水に浸け
苗作りを始める
水槽のふたに雪が積もるのを払い除け
明日には来るであろう
春の陽光を
信じて

（評）　近年の気候の異常さにも季節逆戻りしたかの突然の雪にもゆるぐことなく、長く続けられてきたこよみ通りの米作りの作業にとりかかる。地に足つけて生きてきた作者の農業従事者としての信念とともに詩が上質に香ります。

特　選

アノネノネ

西　今　町
やまかみ　まさよ

冬のあいだ　伸び放題にしてきた畑の
土手草を刈っている
と、耳元に　ささやきかけてくる
……アノネ　アノネ
必死になってカマをふるっている
とまた、胸元にまで　アノネ

新しい団地も出来て　車の往来もある
村はずれの小路
赤ん坊の乗るバギー車も通りかかる
まだ指しゃぶりしながら　手を振っている
この児では　なさそう

根強い草群れの中に腰をおろし
手を休め　汗をぬぐう　と
こんどは芽と目が会う

春先の路肩で　力強くハモっているのは
健気なタンポポ、スギナ、オオバコ達
久し振りに澄んだ空の気配も
疲れた背中に　ほっこり　ゆっくり
アノネノネ　アノネノネ……

（評）　春が来て土手の草刈りに励む作者の、草の芽花の芽の芽生きに気づく、子どものような生き生きとした感性が楽しいです。
　タイトルが四行目の〝アノネ　アノネ〟であったら、もっとほっこりゆっくり感が出たかも――です。

入　選

畑の運動会

平　田　町
谷　澤　正　己

シトシト雨も中休み
今日は楽しい運動会
カボチャはツルの三段跳び
西洋カボチャはホップステップズンズンズン
ぼっちゃんカボチャはヨチヨチヨチ
キュウリはジャンプだヒョロリヒョイ
トマトさんは重量挙げ大玉小玉もなんのその
まっ赤なお顔の力持ち

指折り数えた運動会
梅雨の晴れ間の運動会
ナスの隣はシシトウさん
二人は美味しい煮物のコンビ
時にはニシンも入り懐かしい母さんの味
里いもさんは応援団長
大きな葉っぱでフレーフレー
朝は葉っぱに銀の玉
コロコロ光ってフレーフレー
秋にはまーるく太ってね
みんなのお腹にゴールイン

収穫終った畑には
秋風涼しく吹きわたり
畑の中ではミミズやまる虫が
セッセセッセとトンネル掘って
春の準備をするんだよするんだね

（評）　畑に立って、愛情いっぱいに育てている夏野菜たちに運動会をさせている作者の満面の笑顔の明るく楽しい様子がいっぱい伝わってきます。

入　選

エキストラ

犬上郡豊郷町
藤田始宏

誰だって最初はこの世にいなかったんだから
死んでもともと教えてくれたのは
あなたでした

それでも人が生まれてくると
おめでとうというのはなぜなのでしょう
そこに始まりが宿っているからでしょうか
そこに永遠があるからでしょうか

わたしは街角のエキストラでありたい

それを平凡というのなら
平凡でありたい

それをささやかというのなら
ささやかでありたい

エキストラにはエキストラの
幸せがあるのだから

（評）「エキストラ」には〝追加の　臨時の〟とは別にいま一つ〝とびきりの〟という意味があります。
　市井のとるに足りない平凡なひとりひとりのそれでも他にはかけがえのない特別さへの作者の着眼に敬意と拍手を送ります。

入　選

雨夜のスタートレイル

近江八幡市
中尾友貴

久しぶりの雨　唐突に降り注ぐ
鉄砲水のゲリラ　月は雲のシェルターへ
いつも通りの孤独　左は眺めがいい
吐息よどうか　窓にまとわりつかないで

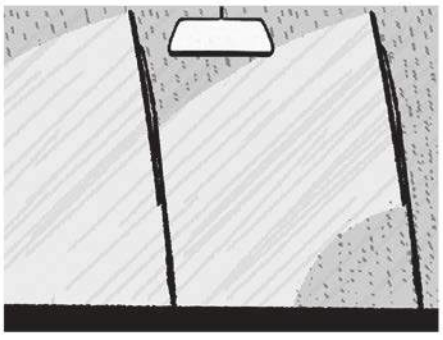
雨夜のスタートレイル
フロントガラス拭きムラこびりつき
雨夜のスタートレイル
右斜め前不意打ちのハイビーム

どしゃ降りの雨　おんおんとまだ叫ぶ
点描のキャンバス　エアコンなしオプション
いつもより遅い道　帰宅は早めがいい
吐息よどうか　風に送り帰されてよ

雨夜のスタートレイル
リアガラスの電熱線に楽譜
雨夜のスタートレイル
星一つないのに雫輝く

雨夜のスタートレイル
頼むから事故だけは起こさないで
雨夜のスタートレイル
明日買いに行こう新しいワイパー

（評）不意のどしゃ降りの雨中の走行。フロントガラスにこわれたワイパーが描き出す模様。車は星空を牽引して走っているのか、あるいは作者は映画スターのように車を引っぱるように走行しているのか。
　御無事でよかったです。



佳作

孫

須越町
みなもと

佳作

秘湯の宿「新玉川温泉」

長浜市
勝木珠枝

佳作

拾い物

古沢町
野洲令子

《総評》

今回は十八篇の作品とお出会いし、今回も九篇を御紹介することになりました。これは、市の文芸作品の募集・選出という性質上やむを得ないことですが、本来文学作品には優劣や順序は無縁なはずなので、残念な思いがいつも残ります。

それでも選者三人は心にひびくものをと、どの作品にもま正面から向きあい合議いたしました。御紹介できなかった作品たちにも、しかとお出会いし拝読いたしております。

つい先日のテレビでのことです。作曲家の久石譲氏が「どうすればいい曲がつくれますか。」と訊かれて、「自作に最初に出会うのは、自分だ。自分が面白い！と思うものをつくることだ。」と答えていました。

詩作品も同じことだと思います。自分が読んで「うん！」と満足する作品を書くこと。そして、もう少し、いやもっと背伸びをしたいと思ったら、「読書はあなたの無限の宇宙(※)」です。世界中の名作の海を泳いでください。

※昔、図書館で出会ったコピー文です。

山本英子

選者吟

ジャングルジム

石内秀典

細い鉄の棒につかまりながら
遂にはいただきに
たどりつく
寄りかかるものは
なにもない
青い空に投げ出された
幼い体が
茫漠とした不安に
浮いている
どこまでもつづく
空の深さに
吸い込まれながら
ぼうぜんとした日があった

そんな深い空から
いま降り注ぐ無数の悲惨
私が暖をとれば
とおくはなれた見知らぬ幼子が
飢える
この星の孤独にふるえる

空へ投げ上げるどんな言葉が
あるだろう

よだかは※
澄み渡る空の果てを求めて飛ぶ
他の命を奪って生きてきた
贖罪のために
身が焼けるところまで

※宮沢賢治「よだかの星」

聴きながら

尾崎与里子

ときおり表情が硬くなるその人は
俯いたまま
自分の指先の感触を
確かめているように見えた
解決は遠く
その人を苦痛の中に閉じ込めて放さない
私はなかなか言葉を見いだせないでいる

いつだったか
隣家のふうちゃんのお婆ちゃんと
ぼんやりした街灯の下で
銀茶色の狐の背を見ていたことがあった
一瞬振り返った狐の表情が
優しかったことを想い出す
ふうちゃんのお婆ちゃんも
ずっと優しい人だった
遠い夜の
冬の終りの空気の匂いと
かすかな春の気配
狐はゆっくりと
通り向かいの寺院の塀の中に
去っていった
「狐だったよね」「狐だった」
ふたりで少しの間笑った

私もあの頃
どうしても抜け出せない
無力な時間の中にいた
深い喪失は
しらずしらず絶望に繋がってしまう
その人の過酷な話を聴きながら
紅茶をもう一杯淹れ
一緒に飲む

胸の灯

山本英子

森の奥の水の邸か
病んだきつねが帰りゆく青い扉の奥か
どこにもないけれど確かにあるその家に
鉄のブレスレットをしたかなしみなら入って
ゆけるその家に
エノラ・ゲイの副操縦士キャプテン・ルイス
が狂う精神で彫った
きのこ雲一つと一粒の涙が
そこには
ある

随筆・評論

今井友子
藤本弘子
山口一　選

特選

お疲れさま

日夏町
田中恵子

あと五分で始まる。私は左横の二人と後列の四人の様子を見やった。

（みんな、気楽にいこうな）

今日は公民館の文化祭だ。これから私たちハーモニカサークルのステージ発表である。コロナ禍でこの一年、人前で演奏していない。去年も文化祭は催されたが、規模縮小で観客は十人ほどだった。今年は目の前に三十人以上が座っている。今年の会の代表になっている私は司会が当っているのだ。

時間がきた。私はマイクを握った。

「みなさん、こんにちは。

私達ハーモニカサークルは、月二回、この公民館で練習しています。今日は秋をテーマになつかしい曲を演奏します。歌詞をお配りしましたので、ご一緒に歌って下さい」

繰り返し練習した最初の挨拶である。

「最初は『庭の千草』です。この曲は……」

と言いかけると、太郎さんが前奏を始めてしまった。（待ってよ、太郎さん）私が曲の説明をしてから前奏に入ることになっているのに……。

彼は今年、米寿である。この後期高齢者ばかりのメンバーの中で、一番年上で一番上手である。無口だが、時折、長い顔をくずして冗談を言う。

彼の前奏に続いて、全員で歌の部分を二回吹く。その後にまた彼の後奏となるのだ。太郎さんは、曲にふさわしく優雅にしっとりと後奏を吹き終えた。拍手が響いた。先程の行き違いなど私はすっかり忘れた。

（さすが太郎さんや、出だし良し）

私はマイクを手にした。

「次は『紅葉（もみじ）』です。この曲はどの世代の人にも愛されています」

前奏は春子さんだ。自信なげな細い音が出だした。彼女はいつも遠慮がちだ。今、一緒にサークルの役員をしている。脇役にまわって私を助けてくれている。歌の部分に入ると、会場から歌声が上がった。私たちはそれに乗って力強く吹くことができた。みんな大好きな曲だ。春子さんも後奏を元気良く終えた。

「次は『森のかじや』です。これは大正元年の曲で、軽やかな楽しい曲です」

夏子さんの出番だ。ところが前奏がいっこうに始まらない。秋子さんが「あんたやで」と小声で促している。「えっ、私か」という声も後ろから聞こえてくる。夏子さんはここ二年ほど物忘れが目立ってきている。ハーモニカ歴は長く、私は、太郎さんの次にこの人が上手いと思っている。演歌が好きで、楽譜を見なくても演奏できる曲がいくつもある。

前奏が流れた。六人が続いた。リズミカルに元気に調子良く吹くことができた。「後奏、後奏」とまた秋子さん。「あっ、そうか」と夏子さん。夏子さんは慌てることなく後奏に取りかかった。大きい拍手をもらった。

四番目、五番目と続いて、六番目の曲は

『野菊』だ。ここでまた太郎さんだ。彼だけが二曲受け持っていた。

「昭和十七年の作品です。戦時中に作られた歌とは思えない、清楚で気品ある曲です」

今度はちゃんと私の説明を待っていてくれた。美しい旋律が流れ、みんなで後に続いた。私の大好きな曲だ。吹いていると幸せになる。

「次は『りんご村から』です。ここで初めて歌謡曲を入れました。三橋美智也の歌です」

前奏は次郎さんである。体格の良い愛想のいい人だ。彼は七人のメンバーの中で一番の新米だ。次郎さんは落ちついて吹き出した。

(上手や、次郎さんは本番に強いな)

六人も気持を込めて曲に入っていくことができた。

「最後の曲になりました。『四季の歌』です。昭和五十一年の作品です。今も多くの人に愛されています」

この曲の前奏は冬子さんだ。いつも冷静で的確なことを言ってくれる。卵型の顔の美人。ハーモニカの音が正確で気持がいい。七人全員で心を合わせて吹いた。無事に終った。

別室でハーモニカを片づけた。お調子者の私は黙っていられない。

「次郎さん、よかったわ」

「わし、この一週間、毎日練習したでな」

(努力したんや、本番に強いなんて思ってごめん、私は挨拶の練習ばっかりしていたな)

冬子さんが一言。

「みんな、よかった」

駐車場で夏子さんがうろうろしていた。

「私の車、どこやったかな」

「今日は私の車に乗ってきたんやで」

秋子さんはそう言いながら、夏子さんのためにドアを開けた。秋子さんはこのサークルの一番の古株だ。いつも仲間の一人一人に気を配っている。二人が乗り込んだ。私も春子さん、冬子さんもそばに寄って二人に手を振った。自転車の太郎さんも軽トラックの次郎さんもこちらを見ている。二人にも大きく手を振った。「お疲れさまでした!」私は地声を力いっぱい張り上げた。

(終わり)

(文中の名前はすべて仮名です)

(評) 読者を惹きつける軽快なリズム。ユーモアと優しさが満ち溢れている作品である。個性豊かなメンバーの人間模様。演奏描写と選曲理由など、作品全体の構成も良い。作者の思いを詰め込んだ題名に、インパクトを感じた。

入選

栗二題

米原市
田中繁男

私昭和十六年生れの八十二歳です。

今いただきものの中国産、甘栗を食べています。この栗はどこの産地か、どのようにして作られて採栗されたのか、どのようなルートで日本に入り加工されたのか、自家製のお茶で甘栗をかみしめていると、子供のころの栗の思い出がよみがえってきます。

○その一　背戸の栗の木

家は農家で田の字形の家でした。そして、はなれ、作業用小屋あり、同じ敷地内には自家用野菜が少量多数作られ、その反対の地はカキ、ビワ、ブドウ、グミ、ザクロ、ナツメ、ユズ、ウメ、さらに摘心もされず空にむかって自由にのび枝も広がる、大きな栗の木がありました。

その思い出は、童謡「里の秋」に歌われている、叙情歌そのものでした。

十月上旬になると栗の実は色づき、家の中にいても実の落ちる音が聞こえ、早朝からの

栗をひろいました。さらに色づくと父親が長い竹竿で下から、そして木に登って落してくれました。それを兄妹三人で集め、色づいた実は木鎌で取り出し、色づかないイガはそのままで、古いカマスに入れ、水をたっぷりかけ、同じように二日目、三日目も水をかけました。三日目の夕方になるとイガを取り出し鎌で実を出しました。白かった実も茶色に変っていて、ムシロで乾燥です。そして製材所へ行きミカン木箱いっぱいの、オガ粉をもらってきて、水とねり合せダンゴ状になるように、水分調整、ミカン箱に栗とオガダンゴを埋めこんで保存しました。十二月になると栗を取り出し、キリで小穴をあけ煮て、あったかいうちに家族全員で食べました。その後は子供のおやつに、一番の楽しみは栗の皮をむき、火鉢の中で焼く栗でした。炭火の近くの灰の中に埋めた焼栗です。栗の大小、水分、火力等で焼きぐあいも変りうまく焼けた時の味は格別で至福の時でした。又落葉はかき集め畑の肥料に、そしてイガ部も集めて乾かし、当時の風呂の五右衛門風呂の燃料に利用、イガはリンゴ木箱に入れてあり風呂が沸く前に、十能ですくって二～三杯くべます。火力は弱いですがゆっくりとした燃でしたが、火持ちは良かった、当時は栗の木のめぐみ全部を使いこなしていました。

○その二　山栗採り

当地方の田んぼは平地も棚田もあり、棚田は山沿に、この山は自家用燃料のために田んぼの近くは雑木で、その中に山栗の木もあり十月初めになると栗は早生、晩生等ありましたが、栗は色づいてきます。我々子供にとっての楽しい栗採りの季節がやってきました。土日曜の午後、子供らは三人一組になり木鎌を手にして農道へ、そこから山を見て山沿いの栗の木の多い所へ向います。そして初めに栗の木をゆすって実を落します。自然に落ちた栗は小動物に食べられています。そして一人が木に登り中ほどから木にぶらさがると、木は弓なりになり下方へ、その時他の二人はすばやく鎌で栗をたたき落します。しかし見込みちがいで空中にぶらさがったままの時もあり、その時はすぐに幹に少しずつ鎌で切り込みを入れて曲げます。この木にぶらさがる事を「ターザン」と言っていました。落した栗はその場でイガを足先で踏み、鎌を使って実を取出します。これらを数回くり返すと、各人のポケットはふくらんできたら農道へ、そこで栗を出し集め、ジャンケンで順番を決め一個ずつ取ってわけました。皮のかたい栗は小刃「ひごのかみ」を使ってむき、渋は親指の爪先で取り口の中へ、食べる時のポリカリ感とほのかな甘さ、この味はさわやかな味でした。

このような事は今知る人も少なくなってきてると思います。子供のころの遊びとおやつ両方の楽しみでした。今だったらあぶない危険だ山を荒すなと言われると思うが、当時はなにもなかった。

（完）

（評）　何と優しい文章なのかと、とても驚いた。作者のありのままの素直な思いに、自然と引き込まれたからだ。子どもの頃の栗の木の記憶が、丁寧に綴られていて、読みながら、学ぶことも多かった。貴重な作品だと感心した。

入選

折々に伊吹山

平田町
伊藤眞雄

折々に伊吹を見ては冬ごもり

元禄四（一六九一）年、最後の江戸下向の折、松尾芭蕉が大垣で詠んだ句である。伊吹山の麓で雪に覆われた地域の様子を、「冬ごもり」という言葉で見事に象徴していると思われる。

伊吹山の麓で生まれ育った私には、この句と共に伊吹山との思い出が浮かんで来る。

小さい時分は、裏庭の斜面を竹スキーで滑ったり、兄達と「かまくら」を作ったりして遊んだ。

中学校では、冬に伊吹山一合目でスキーをし、夏に夜の伊吹山でヒメボタルを見て、星空の下で懐中電灯を頼りに頂上を目指した。朝明けの御来光が鮮烈に浮かんでくる。

高校に入り、長浜から自転車で帰る途中のことであった。青空の下、一面が田畑の所にさしかかった時、ふと前方を見た。伊吹山は私を見るかのように悠然と佇んでいた。

「ああ、伊吹山って、こんなに美しく雄大だったのだ」と呟いた。遠くに見たからこそ、その勇姿が分かったのである。一三七七mの頂から両側に広く下る滑らかな稜線をもつ、その山の姿に魅了された。さらに、伊吹山の鷹揚な姿に励まされることも何度かあった。

大学進学、就職、結婚による転居で伊吹を離れたが、二十年後に伊吹山の裾にある小学校に勤務できた。

その学校での朝、子ども達は前庭で「お早うございます」と登校班ごとに元気な声を出し、一斉に礼をする。その様子が職員室から見える。ある先生が私に言った。

「伊吹山に挨拶をしているのですよ」と。

「山と仲よく」の行事で、全校児童が一合目まで歩き、ゴミ拾いをしてから遊んだ。昼食後、山の伝説、山を舞うイヌワシ、山に咲く花等の話を年ごとに地域の方から聞いた。

冬には三年生以上の児童がリフトに乗り、一合目で地元の人と共にスキーを楽しんだ。地域の人とのつながりを大切に感じた十一年間であった。

その後、南の学校へ異動し、さらに、退職後には彦根へ住居を移して九年が経つ。

昨年の春、米原市教育委員会の高橋順之氏から『伊吹山風土記』なる著書が届いた。そこには牧野富太郎と伊吹山に関する詳述があった。牧野は植物分類学の創始者として有名で、ＮＨＫ朝ドラマのモデルになっている。

牧野は、伊吹山に八回も登っていた。山の植物の豊富さに驚き、そこに咲く花を愛していたことが分かる。また、地域の人々との深いつながりがあったことも記されている。地域の人々の温かさとともに、牧野の誰にも優しい鷹揚な人柄が伝わってくる。

ところが、昨年七月十二日のニュースを知って驚いた。激しい豪雨により土砂崩れが起き、伊吹山の登山道が閉鎖されたという。

私は、伊吹山に会いたくなった。娘に話すと、夏休みに娘夫婦の家族と共にドライブウェイから伊吹山へ行く計画を立ててくれた。

七月二十二日、娘たちが私を誘って、車で伊吹山の九合目に着いた。朝十時、既に多くの自動車が停まっていた。幸い、雲は少なく、外気は涼しい。

山道に入り、砂利道を一歩一歩と踏みしめながら歩いた。鶯の声が夏を忘れさせる。よううやく山頂へ着き、日本武尊の像の下で写真を撮った。近くの椅子に座り、みんなで休憩しながら下界の景色を一望した。

その後、私は周辺を歩いたが、かつてきれいに咲き誇っていた花畑が見つからない。四方が鉄柵の中で、手作業で黙々と除草をしておられる方の一人に、意を決し話しかけた。

「ご苦労様です。たしか、ここら辺に花畑があったように思うのですが…」。

「ここが花畑やったんや。今は山によおる百匹もの鹿があちこちの草花を食い荒らしょるさかい、こんなになってしもうた。ほんで、鉄柵で囲み、もっぺん元に戻そうとなぶっとるんよ。登山道の土砂崩れも鹿のせいや」と懐かしい訛りで、嘆息を込めて話された。

「ひどいことでしたな。お疲れないように。気持ちだけですが」と言い、募金箱に金を入

れようとすると、「その財布ごと入れてかまへんで」との冗談に思わず笑ってしまった。
その後、中学校の同級生夫婦が経営している山小屋で昼食を取った。あいにく主人はおられず、奥さんと昔の思い出に話が弾んだ。
帰り際、花畑が見られずに寂しい思いがしたものの、今も変わらずに温かく接してくれる地域の人々と出会えたことに心が和んだ。
その後のニュースで米原市と滋賀県とが協力して登山道や花畑の復旧に力を入れ、来年春には登山道が開通する計画であるという。
この冬、私は古希を迎えることができた。老いを感じつつも、幸い足腰は丈夫である。時代や自然の大きな変化を受け入れつつ、散歩がてら折々に伊吹山を遠くに眺めている。
（完）

（評）伊吹の山麓で生まれ育った作者が、共感する芭蕉句から思い出した日々は、雄大な山への敬愛であった。時代とともに変化する伊吹山を、自身の老いと重ね、受け入れ続けようとする力強さに感動し、ほのぼのとした。

佳作

秀策の墓を訪ねて

普光寺町
渓　流

佳作

ついうっかりして

大藪町
脇坂修身

佳作

「曾ばあば」になった

後三条町
江畑民子

《総評》

本年度の応募数は十三作で、昨年より少し多くなりました。また、二作投稿してくださった方もあり、敬意と感謝申し上げます。
日常の中で、随筆・評論を書こうと思われた時、作者「私」にしか書けない何かを、もう一度探してみてください。それは、遠い記憶の中にある、貴重な体験やほんの一瞬の偶発的な出来事の中に潜んでいるかもしれません。そして、記憶もまた、何かがきっかけとなって思い出すこともあると思います。
読者もまた、そうした作品の中から新たな発見をし、気づき、作者の感動を共感できるのだと思います。
今回の選考では、規定枠をオーバーした作品があり、良い作品でありながら、残念に思いました。また、個性が光る優秀な作品に、選考は難航し、僅差の結果となりました。
どうか、多くの皆さまが、今後も応募してくださいますよう、心から願っています。

藤本弘子

小説

井上次雄
杉山啓志　選

入選

桐の箱

米原市
ほりた碧伊

昭和三十年代も半ばになると川口秋子は小学生になった。終戦から十年以上も経つと秋子の住む田舎の町にも活気が戻ってきた。有名な戦国武将の城があったという公園には桜が満開となって、花見客で賑わっていた。

そんな場所には傷痍軍人（しょういぐんじん）と呼ばれる人が二人一組になって立っていた。戦争で負傷した人達だ。日本軍の帽子をかぶり、軍病院の病衣を着て、アコーディオンを弾きながら軍歌を歌っていた。左腕の上部には赤十字のマークがあった。前には蓋の開いた飯ごうが置かれていた。

人々は目をそらして通り過ぎた。身体が不自由になったことは気の毒だが、その人なりに出来る仕事はあるだろう。あれではまるで乞食だと陰口を言った。傷痍軍人って乞食やと言い切る友だちもいて、秋子は胸が苦しくなった。

秋子の父、久男は二十四歳の時に志那事変に出征し、極寒の中国で負傷した。

「秋ちゃんのお父さん、なんで手がないん？」

友だちがよく聞いた。

「戦争で怪我しやはったん」

秋子は何の躊躇もなく答えた。しかし、傷痍軍人という言葉は知っていても使わなかった。

久男は仕事には恵まれなかった。貧しい農家の三男坊として生まれ、学校を出るとすぐに大阪の町工場に働きに出た。職人としてコツコツと金物を作り続けていたが、戦争で利き手の右手を肘より上を切断したため、元の仕事に戻れるはずもなく、仕事が合わず、転々とした。

母のよしゑもまた貧しい農家の五女であった。子どもの頃から成績は優秀だったが、女に学問はいらんと言われ、十分な教育も受けさせられることもなく、地場産業のちりめん工場に織子として働きに出た。七歳年上の姉が東京の社会教育家の情報を教えてくれたので、毎月冊子を送ってもらった。同僚が歌手などに夢中になる寮生活の中で一人ひたすら勉強した。全国の人とも文通で交流し、学校を出ていなくても人間性を高めることが出来ると教えられた。二十代の半ばになると人の勧めもあり、公務員試験を受けて合格して、技術吏員となった。

久男とよしゑが結婚したときには一間の借家であった。久男は地場産業のビロードの針切りを内職のようにしていたことがあった。ビロードは毛羽立たせるために針金を一緒に織り込まれるが、針金を取り出すために織り込んだ輪奈（わな）の先をナイフで切っていく作業がある。シャーという音がする。幼い秋子が這って久男のそばに来たので、邪魔にはなるがあぐらをかいた膝に乗せて作業を続けていると、子猫のように丸まって眠ってしまった。その様子があまりに可愛くて忘れられないと、久男は何度もよしゑに話したという。

よしゑは何としても働き続けなければなら

なかった。当時の市内には零歳児を受け入れる保育所などなかった。両方の母親に頼ることも出来ず、そのため職場の近くに個人的にお金を払い、預かってくれるところを探した。何軒も断られたが、商店街から路地を入った小さな自転車修理の店、武田輪店（りんてん）の主人が引き受けてくれた。三人の娘を育てた気の弱い、おとなしい妻が引き受けてくれたのだ。秋子を預かることで得られるわずかな金は、貧しく、慎ましく生きている生活の足しになった。秋子はおっちゃん、おばちゃんと呼んで可愛がってもらった。混乱したのは三人の娘である。突然現れた赤ん坊を母親が神経をとがらせて、世話をするようになったのだ。

娘達から理不尽にも怒鳴りつけられることも多かったし、秋子がいち早く覚えた言葉は「いんで」という言葉だった。古語が残るこの地方の方言で、「帰って」という意味だった。

父親が大黒柱となって家を支え、学校から帰ると白い割烹着を着た母親が迎えてくれる。そんな友だちの家を想像して憧れたが現実は違った。母の自転車に乗せてもらい、帰る途中、「お母さんと一緒で幸せね」と声を掛けた人がいた。その時、秋子は「私は幸せではない」と小さな声で呟いた。よしゑが突然怒り出した。よしゑにしてみれば夫と子どものために自分を犠牲に生きているのに耐えられない娘の言葉だった。秋子はこれは怒られることなんだろうかと思ったが、小さいときから黙って我慢することには慣れている。

その後、秋子が小学三年生になったばかりの頃、武田のおばちゃんが突然に亡くなった。生まれてから九年近く過ごしてきた生活が一変した。

自宅は学区を二区も超えたところであったが、よしゑは秋子を転校させるつもりは全くなかった。職場が学校に近いのはとにかく便利だったのだ。年端も行かない頃から厳しい寮生活で過ごした自分の成育歴と比べても、酷なことではなかった。秋子は学校が終わるとよしゑの職場の隅に隠した小さな自転車で自宅まで帰った。同級生の男子に見つかったときには、「学校に自転車で来たらあかんやろ、先生に言うぞ」と言われた。秋子は普段、学校でははっきりとものを言うタイプではあったが、自分も納得していない違反のようなことには反論の余地はなかった。担任の先生からは転校しろと叱られた。秋子は私にではなく、親に言ってほしいと思ったが、黙っていた。卒業までそんな生活が続いた。

秋子が一人で自宅に帰るようになってから、学校が違うので近所に友だちもなく寂しいだろうと久男はテレビを購入した。近所と比べると大分遅かったが、秋子は学校から帰った頃に外国の映画が放送されるのを楽しみに見た。何度も同じものが繰り返し放送されたし、大人の内容だったが、秋子は感動した。

特に好きだったのが『心の旅路』という古い映画で、戦争で心が傷ついた兵士が記憶喪失になって病院に入院していたが、妻がほんとうに思い出せるまで尽くすという繊細で美しい映画だった。飽きることなく何度も見た。何より驚いたのは、アメリカには戦争で心が傷ついた兵士のための病院があることだった。

久男が帰ってくるとテレビのチャンネル権は完全に久男のものとなった。相撲、落語、プロレスなどで、秋子はあまり見なかったが、アメリカのテレビドラマが掛かったときは久男と一緒に見た。その中で『コンバット！』いう戦争のドラマだけは久男は絶対にかけさせなかった。同級生の男子が面白そうに話しているのを聞いたことがあった。秋子は戦争に負けたアメリカ軍の兵士が、格好良く描かれていることに久男は耐えられなかったのではないかと理解していた。ところが違った。久男はあんな風に上官と部下が親しく話しているのは見ていられないと言ったの

だ。そういえば日本のドラマや映画では軍隊の上下関係ははっきりしていて、厳しく、いじめとすら取れるような仕打ちに、気の弱い若い兵士が苦悩する場面をよく見た。薬莢（やっきょう）の数が合わないと叱責され、身体を休めるはずの夜中に狂ったように探していた場面では胸が張り裂けそうになった。

久男は戦争の話を秋子にすることはほとんどなかった。怪我をして野戦病院に運ばれて肘から上のところで腕を切断されたときはものすごく痛かった。利き手をなくしたのだから、左手で字が書けるようになるために国語の辞書を書き写したと話した程度であった。

久男は明るく、よく動く人だったので、秋子は久男の不自由ささえ気づかなかったほどであった。どこへ行くにも自転車を乗りこなした。急に雨が降ってきたら、傘を貸してやろうと言ってくれる人がいたが、片手では使えんからなあと濡れて帰ってきた。

夏休みのある日、秋子は昼寝をしていたが、そばで久男が友だちと話していた。

「もうあかんと思（おも）たことは何遍もあったで。娘がいたから生きてこれたんや」

昼寝から目覚めた秋子はそばで聞いて、自分は父に愛されていると実感した。しかし、小学生の秋子には久男がもうあかんと思ったことは何かが気にならなかった。

久男には同じ障害を持つ傷痍軍人の仲間がいたが、親から受け継いだ家や田畑もあり、学校の教師であったり、公務員であったりして特に生活に困窮する人たちではなかった。久男は彼らが年を取ると地位も上がって偉そうな態度だとひがんだ愚痴を言うこともあった。その後、必ず「こうは言うてもあいつらとしか分かり合えんこともあるでな」と言った。

久男とよしゑはコツコツと貯金をして五十歳を過ぎて、久男の生まれ故郷に家を建てた。念願の持ち家だった。

家をきれいに整え、庭の手入れも行き届き、久男の自慢だったが、徐々に久男の様子に変化が現れた。秋子の老人福祉に携わる友人がお父さんを病院に連れて行った方が良いよと言ったのだ。認知症状が感じられるというのだ。その矢先、よしゑが目を離した隙に久男は自転車で出かけて転倒し、大腿骨の骨頭を骨折した。

急遽入院となって秋子は仕事を終えた夜に付き添うことにした。久男は突然天井を指さし、「あんなところにラッパがある。帽子もや」と言いだした。せん妄（もう）がでたのだ。一過性のものだと判断し聞いていた。するとのぞき込んだ秋子の顔を見て、「こんなに蜘蛛の巣が着いているやないか」と頬や顎を拭いてくれる。何にも話さなかった戦争の場面が何かをきっかけにしてやはりすぐに出てくるのだ。秋子は辛い体験を抑圧して耐えてきた久男を哀れに思った。

久男は高齢になって大けがをしたが、寝たきりにならず、家庭で介護が可能になった。認知症は進行し、溺愛する秋子の名前も忘れた。

久男は元気なときには傷痍軍人会や身体障害者の会など役員をして頑張ってきたが、思ったことを口にする性格から友だちも多いが、敵も多かった。よしゑは父ちゃんはそんな性格やから私が苦労すると時々秋子に愚痴を言った。友だちと商売を始めようとするが、失敗もあった。よしゑにとって三十歳を過ぎて生まれた一人っ子の秋子はまさに分身であった。秋子は子どもの頃から母の愚痴を聞き、大人であることを要求されてきたのだ。

認知症状からか、穏やかな表情になった久男が秋子に話し出した。

「入隊してきた戦友がな、上官に隠れて胸のポケットから女の人の写真を一枚出してな、『可愛いやろ、可愛いやろ』言うて見せたんや。前の日に結婚式を挙げてきたんやて」

写真を見せる仕草まで真似して、あまりに愛おしそうに言うので、その人は今どうして

おられるのかと秋子は尋ねた。
「戦死した」
ひとこと辛そうに即答したので、それ以上聞く気にはなれなかった。
久男の七回忌を済ませた頃、秋子はよしゑの介護のために、長年勤めた仕事を辞め、よしゑと向き合う時間も増えた。
秋子はよしゑに久男が負傷したときの話を聞いた。
「伝令やったんよ」
よしゑは自分のことのようにきっぱりと言った。危険なところを突破して味方に情報を伝える任務である。
「自分は農家の三男坊で、後を継ぐ兄貴もいるさかい、自分が行く言うて。父ちゃんらしいやろ」
とあきれ顔で言った。
「一緒に行かはった戦友は亡くなったんよ。ここに越してきたときに信頼している人に聞いてほしかったんやろな。その時の話をしたんよ。そしたらその人は何で戦友を助けなかったんやと言わはったんやで。助けられるはずないやん。自分は右手を吹っ飛ばされて血を流してるんや。倒れてる人を抱えて逃げられるはずないやん。それに父ちゃんいうたらな、『自分のことが大事や、人のことなど構(かも)てられん』って言うてしもたんや。損な性格やで。かっとしたかもしれんけど、自分がひどい人間やと言うてるようなもんやないか。それからは戦争のことはもっと誰にも話さんようになってしもうたわ。なんで嘘でもよう生きて帰ってくれたなあと言うてくれはらへんかったんやろと思うわ」
いつも金銭面で苦労し、生活の場面では常に久男の右腕となって支えていることを大変やとぼやいているよしゑだが、やはり一番の理解者であると秋子は思った。
伝令で一緒に走ったのは、あの新妻の写真を見せた戦友だったのだろうか。写真のことをよしゑは聞いていなかった。秋子は混乱した。あの戦友は誰よりも生きて帰らなければならない人である。一日だけの可愛い新妻を残して死ぬはずがない。
「コンバット！」秋子は小学校高学年の時に聞いた父の言葉を思い出した。久男はドラマで上官と部下が仲良くしているのを見るに堪えないと言った。これは秋子の想像に過ぎないが、戦友にとって部隊は辛いところだったのか。川口君が行くなら自分も行くと名乗り出たのか。久男は止めたはずだ。でも行くことになった。誰よりも生きて帰さなければならない戦友を救えなかった。自分を責め続ける人生になったのだろうか。自分だけが生きながらえていいのかと問うた一生だったのか。もうあかんとはどんなことがあったのだろう。娘に恵まれた久男は娘のために生きようと決心したのだろうか。
秋子が高校生の頃、新しい家に移ってすぐに中古ではあったが大きな仏壇を久男は購入した。秋子はどうしてこんな物に大金を支払うのか理解に苦しんだ。反抗すると久男とよしゑは必要な物だと言い切った。その後、久男はその仏壇を大事にした。毎日夕刻になると「正信偈(しょうしんげ)」という少し長いお経を上げるようになった。線香も沈香もたっぷりと使った。
あれは単にご先祖や両親のためだけでなく、戦友のことも思ってのことだったのだろうか。その後、よしゑも亡くなり、三回忌を済ませると秋子は重い腰を上げて二人の遺品整理に取りかかった。久男の気に入りの部屋を物置同然にしていたが、多くの物を処分し、掃除をして床の間には掛け軸をかけ、花台の上には香炉を飾った。高価な物ではないが、うれしそうに秋子に見せていたもので、どれも処分する気にはなれない。他にも花瓶や香炉を納めた戸棚を整理したときのことであった。棚の上段の奥にひときわ黒く変色した細長い桐の箱を見つけた。脚立に乗って取り出すと軽い。空箱かと思って部屋の真ん中に下ろして見ると楷書で箱書きがあった。

「御下賜品」初めて見るものであった。こんな言葉を使って品物を下さるのは今の日本で天皇陛下しか思いつかない。しっかりした桐の箱でおそらく白かったであろう紐を解く。それは空では無かった。八十年以上経っているのに、シミも虫食いもない白い紙の筒に、「御下賜繃帯」と書かれている。箱書きと同じ楷書だ。紙筒の底に一巻きだけ包帯が残っている。包帯を包んでいるセロファンは茶色に変色している。よく見ると紙筒の上下に赤いシールがあり「宮内省皇后宮職」とある。皇后陛下から賜ったものだ。部屋に飾る物ではなく、久男の身体を労るものだったのだ。

後日、本棚から送り状も出てきた。昭和十五年の日付があった。義眼や義肢を必要とするようになった者に皇后陛下が送って下さった物だ。ＮＨＫのドキュメントで明治皇后が始められたと放送されていた物と同じだった。

秋子は思った。久男が素朴な掛け軸を初めて手に入れたとき、小学生の娘相手に漢詩の一節であるような文字を満面の笑みを浮かべて何度も読んで聞かせた。

しかし木箱に入った包帯を見せることは一度もなかった。大正生まれの久男なら、自分はお国のために戦争に行き、こんな身体になって苦労したけれど、皇后様から労っていただいたのだと自慢しても良さそうなものだ。少なくとも娘にだけは。

しかし、わずか五巻ほどの包帯が入っていたようだが、一巻は使わずに残している。これは亡くなった戦友への精一杯のお詫びだったのだろうか。包帯で労われることのない深い深い心の傷を負って生きてきたのだろう。

秋子は遺影に向かって父に語りかけた。

「父ちゃんの気の弱いとこも、心優しいとこも、生き方が下手なとこも、悔しい思いをしてきたことも母ちゃんと私は分かってるで。だけどそれだけで終わったらあかんと思う。この包帯は県平和祈念館に寄贈して若い人に見てもらう。戦争を起こさない人に育ってもらうためにな。私は戦争の惨さを伝えることを考える。今の時代、またきな臭くなってきた。私に何が出来るか分からないけれど、一生懸命やってみるから見ててや。」

父親に誓うものの秋子は自分の非力は分かっていた。悔しくてひとしきり涙をこぼした。

それから四ヶ月後、二十年以上花の咲かなかった小さな東洋蘭に針金のような細い花芽が出てきた。

久男は花の手入れが好きで、たくさんの花の鉢を残していた。秋子は仕事や介護が忙しく、難しい花は枯らしてしまったけれど、君子蘭やシンビジュームは水やりをして、冬場は広縁に並べて取り入れただけで、春になると大きな花を咲かせた。細い鉢に植えられた一鉢の金稜辺という春蘭の仲間の花は久男が認知症になってから咲くことはなかった。

四月になると細い花芽にえんじ色の小さな花が十輪咲いた。秋子は久男に気持ちが届いたのだろうかと思った。

久男が亡くなって八年経った平成二十五年十一月に日本傷痍軍人会および日本傷痍軍人妻の会が会員の高齢化と会員数の減少により解散された。タンスの小引き出しには秋子が処分しなかった久男とよしゑの古い記章が残されている。

これで戦後が一区切り付いたと言う人もいたが、忘れてはならないのだと秋子は思った。社会の片隅で六十年以上も自分を責め続けた一歩兵が全国には他にもいたのではないか。知らないだけで、なかったことにしてはいけないのだ。

「今度また、父ちゃんが金稜辺を咲かしてくれるように頑張るね」

と秋子はパソコンに向かった。今年も君子蘭の大きな白い花芽が何本も出てきた。

佳作

その棘すら抱き締めて

近江八幡市
中尾友貴

（評）　戦争テーマ素材の宝庫だが、欲張りすぎてやまとまりを欠いたか。母や秋子の部分は割愛し、父に焦点を絞る方がよかった。細かいことだが、秋子が預けられ先の娘らに言われた「いんで」にはリアリティがあっていい。

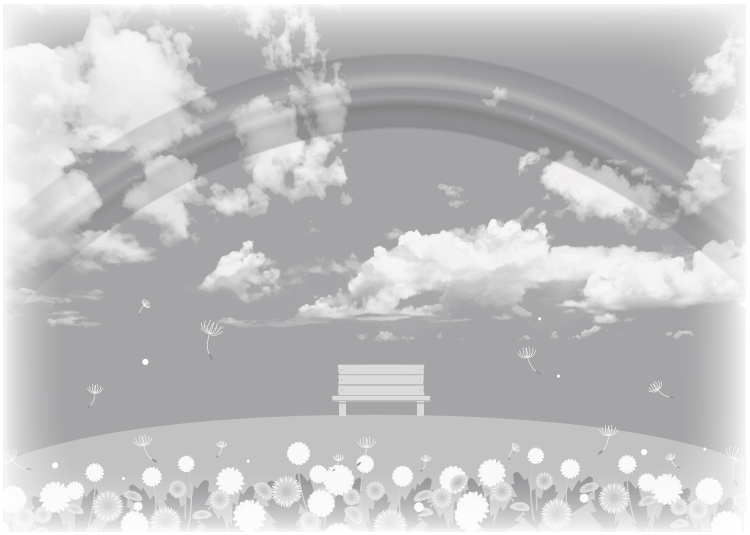
《総評》

入選作について補足。「父」は盛りだくさんだ。傷痍軍人として屈辱の日々。戦友を救えなかった罪悪感。「コンバット」を忌避する理由。最後に満を持して御下賜品の桐の箱の登場。どれ一つとっても小説一本書ける素材。残念なのは、これらがつながらず「羅列」で終わっていること。

もう一つ気になるのは最後の場面。父の思いを象徴するのは、桐の箱に入った繃帯かと思いきや、あれれ、一鉢の金陵辺だったのか。小説の着地が二三歩ずれている。作者に書きたいことがありすぎて欲張った結果がこうなったか。語りすぎてはいけないのだ。

小説に限らず文学において大切なことは「説明」ではなく「描写」だ。詳細かつ丁寧に描写することでリアリティが生まれ、リアリティにより小説は「物語」から進化する。今回惜しくも佳作となったもう一つの作品は、欲張らずバラの花一本で十二枚書き上げた力作だが、「バラは枯れていなかった！」で終わるありがちな話。ステレオタイプは避けるべし。独創的な表現、先の読めない展開こそが小説の媚薬です。

井上次雄



『あとがき』

今年度の彦根市民文芸作品の募集には、延べ二百六十人の方から、総数七百二十五点の作品が寄せられました。

日頃から創作活動に励み、研鑽いただく中、市民文芸作品の作品募集の機会に力作をお寄せいただき、事務局として心よりお礼申し上げます。

彦根市民文芸作品は、今回で第六十回目という一つの節目を迎えました。半世紀の第五十回目を迎えてから、この十年間には、新型コロナウイルス感染症の猛威に見舞われるという、大きな危機がございました。しかし、皆様の文芸への愛情と創作活動への情熱は絶やされることなく、彦根市民文芸作品へ魅力溢れる作品の数々をお寄せいただいたからこそ、今日まで継続できたと実感しております。改めて心より感謝申し上げます。

この機会が、創作活動の一助となることを願いますとともに、来年度もご応募いただけることを心よりお待ちしております。

最後に、入賞作品集の発刊に際しまして、ご指導およびご助言をいただきました選者の皆様をはじめ、関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

彦根市観光文化戦略部　文化振興課

第60回（令和６年度）彦根市民文芸作品入賞作品集

令和６年　７月発行

編集・発行　彦根市観光文化戦略部　文化振興課
〒522-8501　彦根市元町４番２号
彦根市役所４階
TEL 0749-23-7810　FAX 0749-21-3080